陶淵明故里についての一考察

――「飲酒　其五」詩中の詩語を一つの手懸かりにして――

渡部英喜

一　はじめに

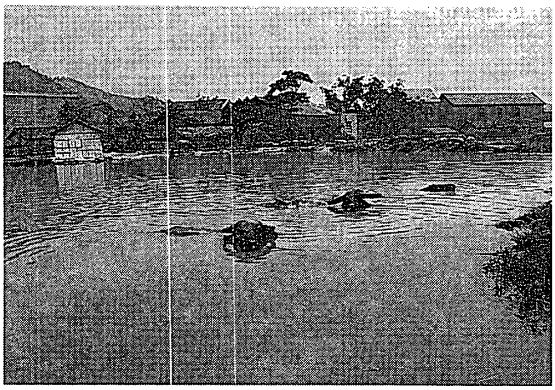
結廬在人境　　廬を結んで人境に在り
而無車馬喧　　而も車馬の喧しき無し
問君何能爾　　君に問う何ぞ能く爾るやと
心遠地自偏　　心遠ければ地自ら偏なり
采菊東籬下　　菊を采る東籬の下
悠然見南山　　悠然として南山を見る
山気日夕佳　　山気日夕に佳く
飛鳥相与還　　飛鳥相与に還る
此中有真意　　此の中真意有り
欲弁已忘言　　弁ぜんと欲すれば已に言を忘る

右の掲げた五言古詩は東晋の田園詩人・陶淵明（三六五～四二七）を代表する作品の一つである「飲酒　其五」詩である。この作品は梁の蕭統（昭明太子）撰の『文選』に「雑詩」として収録されており、古来親しまれてきた漢詩の一つである。また、唐代以降、陶淵明の作品が高い評価を獲得すると、孟浩然を始め、王維・李白・韋応物・柳宗元・白居易・王安石・蘇軾・朱熹といった唐・宋を代表する詩人たちに大きな影響を与えた。わが国でも文豪夏目漱石が『草枕』に「飲酒其五」詩を引用しているので人口に膾炙している。

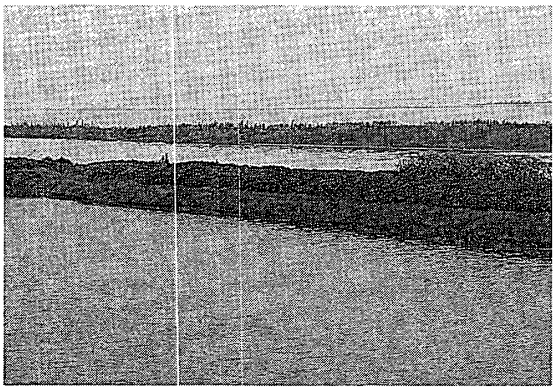
「飲酒」詩は二十首からなる連作である。陶淵明が四十一歳の時、「在官八十余日（官に在ること八十余日り）」（帰去来兮辞）と述べ、彭沢（江西省）の県令を僅か八十日余りという短期間の官吏生活を送ったあと、自ら免官を求めて職を去った後の作品とみられている。陶淵明は二十九歳から四十一歳まで、断続的ではあったが十三年間出仕していたのであるが、四十一歳を最後に官吏生活に別れを告げ、二度と再び官吏生活には戻らなかったのである。「少無適俗韻　性本愛邱山（少（わか）く して俗に適するの韻無く　性本と邱山を愛す）」（帰園田居）と詠むように、若い頃から自然を愛しており、その自然を求めて隠逸の生活に入ったようである。名文の「帰去来の辞」も、名詩の「飲酒」も隠逸の生活を送り始めたばかりの頃の作品であり、故里で作られたものである。

陶淵明の故里は『宋書』及び『南史』、それに蕭統の『陶淵明伝』などには「尋陽柴桑の人なり」と記載されているが、その在りかは未だに正確には特定されていないのであるが、宋代より今日に至るまで、陶淵明の有力な故里は次に掲げる五カ所であると考えられてきた。

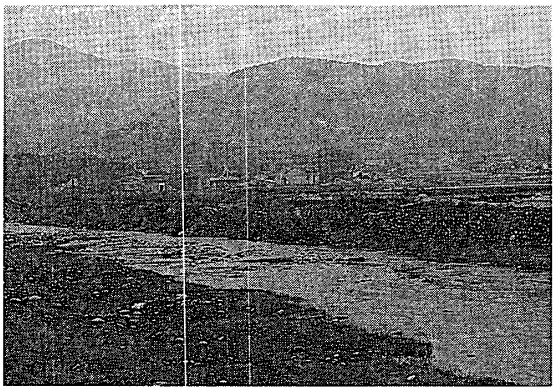
ⓐ 楚城郷柴桑山鹿子坂あたり（今の江西省九江県馬頭村荆林街一帯）⇩写真①



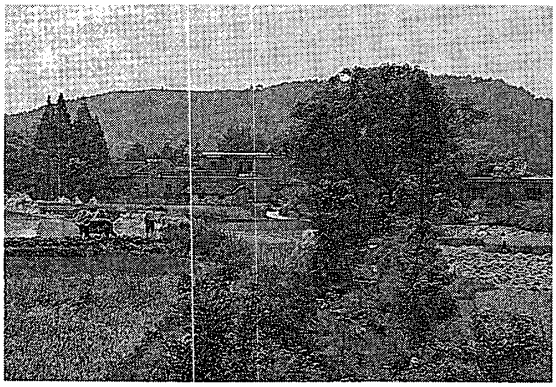
写真①　荊林街風景



写真②　賽湖湖畔



写真③　玉京山風景



写真④　栗里陶村の田園風景

ⓑ 尋陽城遺址（今の江西省九江県賽湖に湖底に沈んでいる）⇩写真②

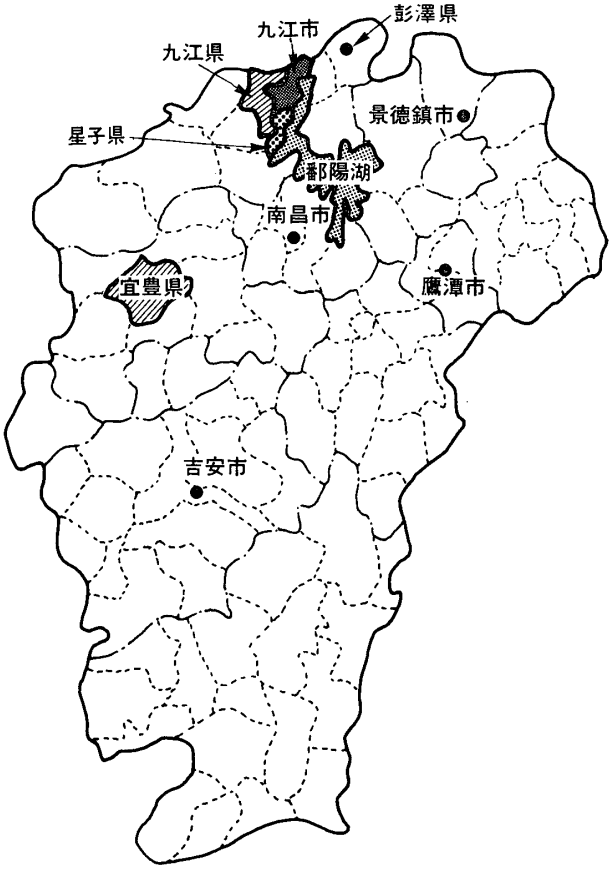
ⓒ 南庚府城西の玉京山或いは上京山（今の江西省星子県南康村の西二・五キロ）⇩写真③

ⓓ 廬山南麓の栗里陶村（今の江西省星子県温泉付近）⇩写真④

ⓔ 宜豊（今の江西省宜豊県）

この五カ所の何れかで「飲酒」詩が詠まれたことに違いない。五カ所の中で、ⓐからⓓまでの四カ所は江西省の北部の廬山山麓か、或いはその周辺に点在している（図1・2参照）。これに対して、ⓔ宜豊県は江西省の西部に位置しており、廬山の山麓からは遠く離れているのである（図1参照）。宜豊県が陶淵明の故里とされた理由は宋の楽史撰の『太平寰宇記』に「陶公始家宜豊、後徒柴桑」と記載されてからである。地理書の『太平寰宇記』は経典『図経』からの引用である。『図経』は已に散逸しており、どんな性質をもった書物であったかまったく見当がつかない。その上、しっかりした考証がなされていないので、全面的に信用するわけにはいかないだろう。であるから、陶淵明の故里として取り上げる必要もなかろう。つまり、陶淵明の故里はⓐからⓓまでの四カ所に絞ることができる。

陶淵明の故里は一般的にはⓓの栗里陶村が最も有力であるとされてきたが、実は陶淵明の故里はⓓの栗里陶村ではなく、ⓐ楚城郷柴桑山鹿子坂あたりではないかと私は推測している。この小論では「飲酒　其五」の詩中に詠み込まれた二つの詩語を拠り所にして、陶淵明の故里を特定してみたいと思う。二つの詩語とは「東籬」と「南山」である。中でも、「東籬」の「東」が有力な手懸かりを与えてくれている。更には、名文として名高い「帰去来の辞」の文中の「西疇」と「東皐」の語句も故里解明の有力な手懸かりを示している。であるから、「東籬」と「南山」、「西疇」と「東皐」を廬山付近の地形に当てはめて考えて

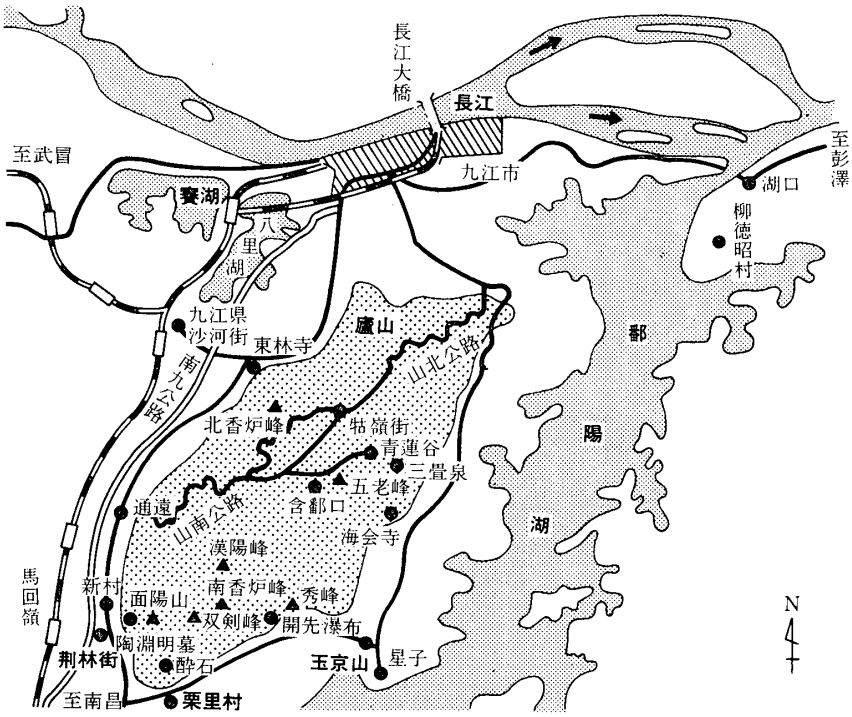


江西省全図（図1）

みると陶淵明の故里は自らⓐの柴桑山鹿子坂あたり（今の九江県馬頭村荆林街一帯）以外にはないということになる。それを本論で考察してみたいと思う。

二「飲酒　其五」詩の世界

先ず初めに「飲酒　其五」詩がどのように構成されているかを述べてみよう。この詩は三解（三段落）から構成されている。一解（一段）は一句目から四句目までであり、この解は陶淵明が車馬の往来の激しい村里に居を構えてはいるが、心の持ち方一つで喧騒から逃れることが出来ると歌っているのである。つまり、隠者らしい暮らしぶりを送っていることが詠み込まれているのである。続く二解（二段）は五句目から八句目までである。ここは、一解で詠んだ隠者の暮らしぶりをより具体的に詠じている。晩秋の夕暮れ時、屋敷の東側の間垣で菊を摘み取っている。しばし、菊摘みに疲れ腰をのばして、霞たなびく南山をゆったりとした気分で眺めていると、カラスやスズメなどの小鳥が二つ、四つ、三つと連れ立って塒に帰っていくという長閑な田園風景が具体的に詠じられている。残りの二句が三解（三段）である。ここでは二解を承けて詠まれている。九句目の「此中」とは二解の長閑な田園風景を指していることは勿論のことあるが、詩題が「飲酒」であることを考え合わせれば、杯の中をも含めた長閑な田園の世界とみるべきであろう。杯の中には菊を浮かべた酒が入っていたのかもしれな



陶淵明関係図（図2）

い。なぜならば、詩中に「菊を采る東籬の下」と詠じているからである。ともすれば、酒と菊とから、九月九日の重陽の節句を意識させているのかもしれない。こうした長閑な世界と杯の中にこそ人生の真意が隠されていると歌っているのである。「飲酒　其五」詩の構成は前述した通りであるが、この詩の二解で具体的に描かれている田園風景の中に陶淵明の故里を発見するキーワードが隠されている。そのキーワードは、

采菊東籬下　菊を采る東籬の下
悠然見南山　悠然とし南山を見る

と詠む二句（五・六句）の中にある。「東の間垣のもとで菊を摘み取っている。菊摘みに疲れ、腰をのばすと眼前には南山が横たわっている。その南山をゆったりとした気分で眺め入っている」というのが句意である。長閑な田園風景の写生である。

この二句の中に陶淵明の故里を特定するキーワードが詠み込まれていると先に述べたが、そのキーワードとは「東籬」と「南山」の二つの詩語である。「東籬」とは屋敷の東側にある間垣のことである。その間垣に沿って菊が南から北に向かって細長く植栽されている。その間垣の先に南山が見えているのである。東の間垣の先（向こう側）というのは東の方向に山があるということであろう。つまり、南山は南側にある山ではなく、東側に聳え立っている山ということである。

次に「南山」について考えてみたい。中国には「南山」と呼ばれる有名な山が二カ所ある。一つは長安（今の陝西省西安市）の西南に聳え立つ泰嶺山脈の一峰である「終南山」のことであり、もう一つは尋陽城（今の江西省九江市付近）の南に横たわる「廬山」である。どちらも名山として聞こえる山である。この詩に詠じられている「南山」は尋陽城の南にある「廬山」を指していることは言うまでもない。しかし、「飲酒　其五」詩中で詠まれている南山は尋陽城の南側に聳え立つ山という単なる普通名詞で捉えるのではなく、固有名詞としての「南山」とみるべきであろう。また、詩中で廬山のことを「南山」と詠じたのは、前句に「菊」字を用いているからにほかならない。「菊酒」には厄を払い長寿を願うという意味が込められており、それが長寿を願う成語の「南山之寿」（『詩経・天保』）と結び付いているのである。「南山之寿」は言うまでもなく、終南山に関わる言葉であるが、隠逸の生活を送りながら、長寿を願う陶淵明が「南山」を意識しないはずがない。しかし、仮に南山が故里の南側に聳え立っている山というように捉えれば、陶淵明の故里は⑥説の尋陽城遺址（今は九江県賽湖の湖底に沈んでいる）ということになる。⑥説を唱える学者も多いが、それは「南山」の「南」字に捉われ過ぎているからではなかろうか。では、どう判断すればよいのであろうか。その判断の手掛かりは、陶淵明が帰郷後に書き綴った韻文による自叙伝「帰去来の辞」の文中にある。「帰去来の辞」は全編を四字または六字の対句を基調とし、自らの境遇と人生観を見事に論述している名文として知られている。宋代の文章家で有名な欧陽脩が「晋に文章なし、幸いに独り此の篇あるのみ」と激賞しているほどの文章である。

「帰去来の辞」の構成は四段落に分けられている。その三段目は「世俗と交際を断ち、田園生活を続ける喜びと再び出仕しない決意」が述べられている段落であるが、その段落の中に、

将有事於西疇　将に西疇に事有らんとす

という一文がある。また、四段目は「自然に同化し、自然のままに人生を送ろうとする心境」を述べて名文は結ばれているが、その段落中に、

登東皐以舒嘯　東皐に登りて舒嘯す

という一文がある。この文中に書き著されている「西嘯」と「東皐」の語句が陶淵明の故里の地形を見事に描き出しているのである。つまり、陶淵明の故里の地形を証明する有力な手掛かりを提供しているのである。

「西疇」は西側にある田（耕地）という意味であり、「東皐」は東方の丘という意味になるが、皐を沼沢と見る説もある。しかし、ここは丘という意味に取るべきであり、この東方の丘は廬山の支脈を含めた廬山を指しているはずである。東皐が廬山であると論述した先学者はいないが、この東皐が廬山を指すことは疑う余地がない。具体的にいえば、廬山の一峰である面陽山か、馬頭山を指しているものと思われる。陶淵明自身が廬山を指して、「丘」と言っている例は、「斜川に遊ぶ」という古詩に付けた序文に見出すことが出来る。それには、

彼南皐者、名実旧矣　　彼の南皐なる者は名実に旧し

と書き綴っている。陶淵明の遊んだ斜川の位置は、

① 栗里の南
② 鄱陽湖のほとり

という二説ある。本論では斜川の位置が何処であったということを述べるつもりもないが、①と②の両方とも廬山の見える方角が南側でないことだけは確かなことである。①の栗里からは廬山は北に見え、②の鄱陽湖からは西北の方角に廬山が聳え立っているのである。つまり、北や西北の方角に聳え立つ廬山を陶淵明は「南皐」と呼び、丘（皐）と呼んでいるのである。「斜川に遊ぶ」詩の序文以外の詩文からは廬山を丘と呼んだ例を見つけ出すことが出来なかったが、廬山を「丘」と呼んだ確かな証拠例を一つ揚げることが出来るのである。

廬山山麓には陶淵明の故里が四カ所もあるが、東側に丘があり、西側が耕地になっているという地形は ⓐ の楚城郷柴桑山鹿子坂あたり（今の九江県馬頭村荆林街一帯）をおいて他にない。しかし、「東皐」を東にある沼沢とみる場合は ⓑ の尋陽城遺址（今の九江県賽城湖湖底）と ⓒ の玉京山或いは上京山（星子県南康村の西二・五キロ）の二カ所がそれに当てはまる。ⓑ の尋陽城の場合は東西南北の全ての方角に湖沼が点在している。そうであれば、「東皐」とわざわざ限定して使用する必要はない。また、ⓒ の玉京山或いは上京山の東側には中国第一の淡水湖鄱陽湖が水を満々とたたえており、「東皐」の趣を呈しているように感じられるが、すぐ西には廬山の山並が迫っており、「西疇」の雰囲気はまったくないのである。

次は ⓓ の栗里陶村（今の星子県温泉付近）であるが、ⓓ の栗里陶村の西南と北に廬山が迫り、「東皐」と「西疇」といった地形にはまったくなっていないようである。ただし、この栗里陶村は ⓐ の楚城郷柴桑山鹿子坂の南に当たっている。陶淵明は隠逸生活に入ってから三年目の六月に火事に遭い、住居を失って、しばらくは船中での仮住まいを余儀なくされた後に南村に居を移している。すなわち、「移居」詩にいう「南村」である。ということであれば、栗里陶村は官吏生活を辞めて直に隠逸生活を始めた村でないということになり、「飲酒」詩を作った場所としての可能性が極めて低いことになる。この栗里陶村には今も陶姓を名乗る村人が全人口の七、八割を占めている。なお、出火した場所が玉京山（上京山）であり、南村が栗里陶村とする説もある。この説に従えば、栗里陶村は玉京山の南になければならない。しかし、実際には栗里陶村は玉京山のほぼ真西に当たる。であるから、玉京山は陶淵明が「飲酒」詩を詠じた故里としての根拠を欠くことになる。ただ、玉京山が陶淵明の故里であると考えられるのは、東側にある鄱陽湖の対岸に陶淵明が県令として勤めた彭沢県（今の柳徳昭村）があったと仮定した場合に限る。現在、陶淵明が県令として勤めた彭沢県が二カ所あると考えられている。一つは長江沿いにある彭沢（今も彭沢と呼ぶ）であり、もう一カ所は鄱陽湖の東岸にある柳徳昭村である。柳

徳昭村と考えた場合、鄱陽湖の西岸、つまり、柳徳昭村の対岸に玉京山（上京山）があり、距離的には近いのである。それからもう一つの理由として、玉京山から鄱陽湖に向かって、二本の河川が流れ込んでいることであろう。県令を罷めた陶淵明は二期作で収穫したばかりの穀物を船を積んで故里を目指すには河川が必要であるからである。しかし、私は陶淵明が県令をしていた彭沢は柳徳昭村ではなく、今も彭沢と呼ばれている彭沢県ではないかと考えている。彭沢県には陶淵明ゆかりの読書台が残されている上、同じ長江沿いで、彭沢の少し下流にある東至県東流鎮（安徽省）は晋代には彭沢県に属しており、この地に陶淵明がしばしば足を運び、遊んだところとして知られているからである。東至県には陶淵明を記念した靖節祠（陶公祠ともいう）が建つ。ゆかりの地に建立されている靖節祠は明の万暦元（一五七三）年の創建といい、清の順治二（一六四五）年に再建されたものと聞く。靖節祠の建立が明・清ではあるが、ゆかりの地にたつことを考えれば、県令をした彭沢は今も彭沢県と呼ばれている地ではないかと思う。

さて、陶淵明故里は廬山の地形を考えた場合、ⓐの楚城郷柴桑山鹿子坂（荆林街一帯）以外には考えられないのである。また、船で帰郷した場合でも、荆林街の西南に廬山河が流れており、その川を使って米の運搬をしたであろうと考えられるからである。「飲酒」詩や「帰去来の辞」の語句を手掛かりにし、また、地形の上から考えてみても、ⓐの楚城郷柴桑山鹿子坂が最も故里に相応しい場所のように思われる。

三　結　び

「飲酒　其五」の詩中に詠まれている「東籬」と「南山」の詩語を手掛かりに、更には「帰去来の辞」の文中に書き著されている「西疇」と「東皐」の語句を拠り所に、更に五度に及ぶ現地踏査を踏まえて、陶淵明の故里は楚城郷柴桑山鹿子坂あたり（今の九江県馬頭村荆林街一帯）であると結論付けた。また、荆林街の村を幾らか外れた南側に、六十メートルにも満たないような孤峰（牛頭山）がポツンと立っている。その山の旧名が少しく気に懸かる。現地踏査の折には気付かず、今も後悔の念を抱き続けているが、後日にもう一度機会を作って訪れて、その旧名を確かめたいと思っている。もともとの山名が柴桑山であれば、荆林街あたり一帯が陶淵明の故里であることが決定的になるはずである。

ここでは、「飲酒　其五」の詩語を通し、それに「帰去来の辞」の語句の助けを借りて陶淵明故里は荆林街（楚城郷柴桑山鹿子坂あたり）であると結論付けたわけであるが、「東」や「南」、それに「西」などの方角を表わす語が修辞的な表現であると見れば、故里は特定出来ないことになる。しかし、「飲酒　其五」と「帰去来の辞」の語に限って考えれば、陶淵明の故里は荆林街以外には考えられないのである。

陶淵明の書き著した他の詩文を参照してみたい。「帰来の辞」と表裏一体をなす作品として知られている「田園の居に帰る　其三」詩は、

種豆南山下　　豆を種う南山の下

と歌い出している。この作品も二十九歳の時、初めて出仕して以来、断続的にではあるが出仕し、四十一歳の時、彭沢の県令を最後に役人生活からきっぱりと足を洗い、故里の柴桑に閉じ籠もり、隠逸生活に入った時に詠われたものである。この詩中の南山も「飲酒　其五」で詠じられた山と同じ廬山のことである。だが、この詩からは南山の位置を推察することはできない。が、「飲酒　其五」詩を拠り所すれば、当然、この南山も間垣の東側に聳えたつ山のことである。

さて、同じ詩題である「田園の居に帰る」詩の「其の一」の七・八句目の歌いぶりが些か興味深いものがある。

開荒南野際　　荒を南野の際に開かんと

守拙帰田園　　拙を守って田園に帰る

と詠まれている聯である。故里の柴桑で「南側に広がる荒れ地を開拓し、世渡りベタの分を守って田舎に帰ってきた」と詠じている。荆林街の南側は陶淵明の卒後、一千五百七十二年の歳月が流れている今日、緑豊かな田畑が広々と広がっている。

陶淵明の故里は「飲酒　其五」の詩語と「帰去来の辞」の語句をもって考えるならば、今の荆林街以外にはない。だが、住居跡となると、今の荆林街の村里から少し離れた所に居を構えていたような気がしてならない。その確かな根拠があるわけではないが、「帰田園居　其一」の詩から推測してみたい。この詩の九句目から十二句目にかけて「十余畝のこぢんまりした四角い宅地は、部屋の数八、九の草葺きの住まいであり、その住まいを囲んで、楡や柳、それに桃や李などの樹木が植えられている」と詠んでいる。その屋敷内から「遥かに離れた村々が霞んで見え、懐かしい里の煙が立ち上っている」と、

曖曖遠人村　　曖曖たり遠人の村
依依墟里煙　　依依たり墟里の煙

と詠じているからである。遥かに離れた所とは、陶淵明が今も深い眠りについている面陽山（廬山の一峰）の山麓に近いあたりではないかと推測している。故里での隠逸の生活は東に聳え立つ廬山（南山）をゆったりした気分で眺め、東側の間垣に植えられている菊を摘み取りながら気侭に暮している。いかにも、隠者らしい暮らしぶりである。

（九七・十一・三十記）

参考文献

徐声楊著「陶淵明〝始家何処〟」（『九江師専学報』一九九七年三月）
鄧鐘伯著「陶淵明故里説」（『江西師院学報』一九八二年第二期）
鄧安生著『陶淵明新探』（文津出版社）
井上一之著「六朝時代の尋陽について」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第一九集一九九二年）

《附記》本稿は一九九七年七月三十一日、陶淵明ゆかりの中国は江西省・廬山賓館で行われた首届中日学者陶淵明学術研討会において「陶淵明故里小考―以『飲酒其五』為銭索―」と題して口頭発表したものをまとめたものである。